

座談会
1

コロナ禍の時代を生き抜くために

——オンライン授業の経験を通じて見えてきたもの——

出席者

佐藤都喜子 副学長／国際教養学科長・教授

島田周平 世界共生学部長・教授

奥田隆男 現代国際学部長・教授

沼野充義 副学長／教養教育推進センター長／
世界教養学科教授

「言葉の重み」を実感させられる

沼野充義 今日皆さん、お集まりいただきありがとうございます。お互いに大学の同僚として、会議などではよちゅう顔を合わせる仲ではありますが、じつは互いの物の考え方とか、生き方について話し合うようなことがほとんどありません。私たち自身にとっても今日は貴重な機会になると思います。

今日は「コロナ禍の時代にどう生きるか」というテーマで、大学のこれだけに限定せずに少し広い視野から、各自の個人的な思いや人生観、世界観も含めて自由に話し合いたいと思います。まず、この前代未聞の状況を皆様が研究者・教育者としてどう受け止めたかというあたりから、始めましょうか。佐藤さんからお願ひできますか？

佐藤都喜子 正直なところ、コロナ禍のためオンライン授業に変わると伺ったときは、本当に戸惑いました。私は、大型コンピュータを使ってデータ処理をしていた時代に大学院を卒業していますので、インターネット世代ではありません。おまけに、不特定多数と交流するSNSに全く関心がありませんでした。そんな状況の中で、MeetとかZoomを使わなくてはならないということで、大分抵抗感がありました。当初は、テクニカルにもなかなか追いつかなくて。ついには自分の息子に頭を下げながら、そして「覚えが悪い」と怒られながらも、とにかく使えるようにとやっているうちに、少しずつ慣れてきました。そのうちに抵抗感も薄れ、この辺のことに興味が湧いてきて、今はSNSにも手を出しています。

そうはいっても、オンライン授業のために使ったら便利と思われる様々なツールについて理解しているわけではありませんし、現在使っているMeetとZoomにしても付随する便利な機能を見逃しているんだろうなと思っています。普段使っています電子レンジとか洗濯機などにもたくさん機能が付いていますけれど、これらにしてもその中のせいぜい二つか三つしか使っていないわけですから。同じように、オンライン授業をするに当たって困らない程度までの技能にしか達していないと自覚しながらMeetやZoomを使っています。とにかくオンライン授業をやら



(写真左上：沼野充義、右上：佐藤都喜子、左下：島田周平、右下：奥田隆男)

なくちゃならないということ、ここまでやってきたというのが実情です。

オンライン授業を始めて見て、どんな気づきがあったかと申しますと、「言葉の重み」です。対面授業ですと、よく言われますように、言葉以外に学生さんの顔の表情、しぐさ、姿勢、それにその場の雰囲気などから、多くのメッセージや情報を受け取るので、それほど自分の発する言葉に注意を払ったことはありませんでした。ところがオンライン授業では、学生さんの顔出しなしの授業が多いので、学生さんの反応がよくわかりません。そのため、だれにでもわかるように話す、そして正確に情報や知識を伝達するという、対面授業をする上でも重要なスキルについて今さらながら再認識させられました。オンライン授業を通して「言葉の重み」を強く実感させられたわけです。

また、自分自身、滑舌が良くないことはわかっていましたので、滑舌を良くしなくちゃと思いついてお風呂に入っている時に発声練習をしたり、画面に向かっている学生さんが話に飽きないためには話し方に抑揚をつけなくちゃとも思いついて、テレビを見ながら、ニュースキャスターがどう話しているかを研究するようになりました。ですからオンライン授業は、私自身の話し方を改善する良い機会になりました。

個人的にこういう利点はあったのですが、困ったこと、残念だったと感じたこともあります。まず、オンライン授業では、学生さんの習熟度が体感しにくかったということ、それにまだお会いしたことのない学生さんの人柄とか性格とか特徴とかが把握しにくかったということです。オンライン授業は一年間続きましたので、教員としては普段にはないジレンマを感じました。

また、私の研究室の前の廊下は「銀座通り」と私が名付けていますように、学生さんの通り道になっていましたので、以前は私の研究室の電気が点いていると学生さんがフラッと現れたり、真ん前の廊下で学生さんとバッタリ出会って雑談をするとかしていました。そういうところから、いろんな意味での交流があったんです。ところがオンライン授業に

なりませんとそういう機会がなくなつて、学生さん一人ひとりときちんと接し得なかったというのを感じています。それを埋めるために、気になる学生さんには個人的にお声をかけて、Zoomでお話ししたりといった努力はしたのですが、自分としては物足りなかったです。

もう一つは、演習科目を遠隔で実施することに限界を感じました。現在使っていますツールでは、演習を対面と同じクオリティで実施するのに無理があると思いました。そのため、チームワーク力をつけるとか、リーダーシップを引き出すとか、そういうことには取り組めなかったという忤怩たる思いがあります。

以上が、私が一年間オンライン授業を実施して感じたことです。

沼野 いま佐藤さんが言われたことは私も身に染みて感じました。われわれ教師だつて、特に今日お集まりいただいた「シニア世代」には、こういう状況に即座に適応して、インターネットやパソコンのツールを使いこなすのは恐ろしく大変ですよ。ただ立場上、我々は「先生だつて大変なんだよ」とはなかなか言えない。そういうつらい一年ではありましたね。

それでは、次に島田さん、いかがでしょうか。

アフリカからコロナ禍を見れば

島田周平 私は専門がアフリカなので、コロナ禍が問題になってからも常にアフリカのことになっていました。それで気がついたことが、三つあります。

一つは、アフリカの人から見たら、このコロナというのは既にある感染症のうちの一つで、都市部を中心に少しずつ拡大している感染症だという点でした。もう一つは、感染症と言われているものにも二種類あって、先進国でも感染が拡大して大ごとになる病気と、自分たちアフリカでは大変なのだが先進国ではあまり感染が拡大しないものの二種類があるということです。

アフリカでは毎年マラリアでたくさんの方が亡くなります。今回のコロナに関しては、アフリカの感染者は現在二百五十万人ぐらいで死者はまだ六万人に達していない段階です。フランスとはほぼ同じレベルです。十二億人の人口のアフリカと七千万人弱のフランスとはほぼ同じ規模だということです。これに対し、アフリカでは毎年マラリアで四十万人前後の人が亡くなっています。つまりアフリカにとってコロナというのはマラリアの七分の一程度の死者しか出ていない病気だということです。しかしその感染症に対しては、世界中の薬品会社が全力で取り組み一年未満でワクチンができました。これはアフリカの人たちには衝撃でした。感染症に対応するための体制にも二重構造のようなものがあることを改めて見せつけられたということです。しかも先進国はそのワクチンの買取りを予約しています。これじゃあいけないというので、「途上国にワクチンを供給するための国際的枠組み」(COVAX)で少なくとも数億回分ぐらいのワクチンは発展途上国に確保しようという議論が出ましたが、どれくらいになるのか心もとない状態にあります。

三つ目は、アフリカの一部の政治家たちがコロナ禍を利用しようとしているという点です。彼らはコロナの感染防止を理由に、政治的な対立者を弾圧したり、あるいは選挙をコントロールしたりしようと画策しています。いつもなら世界的なニュースになるような、デモ隊への発砲や政治的対立者の逮捕など人権侵害にあたる行為も、このコロナのおかげで免責されている感じがします。アフリカを見てみるとこのような点が気になりました。

沼野 アフリカの視点から見たコロナ禍というのは、目からウロコですね。私たちはつい自分の状況ばかりに気を取られて、世界のことを忘れがちになる。ついでに言えば、今年夏に迫ったオリンピックが東京で開催できるかということだって、日本だけ感染状況が改善すればできるというものではない。オリンピックは世界の祭典ですから、世界の状況を見たらうで、日本の利権だけでなく、世界の人たちの健康と命を視野に入れて判断しなければならぬと思います。

アフリカではコロナ禍は独裁者にとつてはむしろ都合がいいという点も、なるほどなあと思いました。これはおそらくアフリカだけではなくて……。

島田 東欧もそうでしょう。

沼野 イタリアの思想家アガンベンなどは、こういう緊急事態、彼の言い方だと「例外状態」になると、権力による統制が強化されて、全体主義的な傾向が強まるから危険だと警鐘をいち早く鳴らしていました。「それは言い過ぎだろう」って、スラヴォイ・ジジエクなどからは「こういう非常事態なんだから、多少統制が強まっても仕方ない」といった反論も出て、議論になっていったんですね。いずれにしても非常事態下で国家権力による個人の自由の制限が許されるのかという問題は現に日本でも議論になっていて、程度の差こそあれ世界共通の問題ではないでしょうか。

AI教育の重要性——統計に騙されないために

島田 私自身はコンピュータを使うことがあまり好きではないので「オンライン講義は嫌だな」と思っていたのですが、先生の中には「オンラインって結構教育効果がある」という意見を述べる人があり、少なからずショックを受けました。教師の側から一方向に教えるにはオンライン講義は効率が良いところがあることは私も感じていましたが、本当に大事なのは、教えることではなく伝えることだという気持ちはどうしても拭えず、相手も反応して「そうだよな」と納得しながらでないとうまく伝わらないのではという気持ちの私の中には残っているのです。オンライン授業で「学生たちが提出するレポートが良くなった」という感じは私も感じたところですが、そのことだけでオンライン授業の「教育効果」を評価しようとするのは少し危ないのではないかという思いは今もあります。

それともう一つ痛切に感じたのは、AIの教育の重要性です。文科省が俄かにAI教育の重要性を説き始めましたが、「強化しなさい」と言

われてやるのではなく、必然的にこれからは文系の学生たちもAIについては初歩的だとしても学ばなければならないのではないかと思います。特に今回のコロナ禍で明らかになってきたのは、一部の政治家たちにもみられた統計に関する無理解とも思える言動だったとおもいます。統計にはいろいろな方法がありますが、その結果の「解釈」は慎重にしなければなりません。統計は使う人の意図によって違った解釈を引き出せることがあるからです。少なくとも相関関係と因果関係は全然違うことを理解して統計を見る必要があると思います。ワクチン予防接種の場合、90%以上の免疫効果があると言っても数%の副作用が出るだけでワクチンとしては落第でしょう。同じ厳密さを装っているようですが、政治家の人たちが「GoToキャンペーンで実害があったというエヴィデンスは出ていません」と言っているのを聞いた時には、AI教育の必要性を痛切に感じました。GoToキャンペーンの実害は確かに「未だ」証明されていませんが、それは実害がなかったことを証明していることにはならないからです。

このようなレトリックに引つかからないだけの教育は必要だろうと思います。今回のコロナ禍で起きた様々な経験を経て、文系の名古屋外大の学生たちもAIの素養を身につけなければならないと強く感じました。

沼野 AIに関連してのご指摘についても私もまったく同様の危惧を抱いていました。統計上の数字とか、さらには感染症の専門家と称せられる人たちの知見さえも、本当に人間の健康や命のためじゃなく、政治的な操作に都合のいい道具になってしまうという危険はアフリカだけではなく、中国も日本もアメリカもロシアもそういう意味では同じような危険をはらんでいるんじゃないかと思いました。

それでは、今度は奥田さん、お願いいたします。

コロナ禍でも変わらない生活

奥田隆男 コロナ禍で何か自分が変わったかとか、新しく受け止めるこ

とが出てきたかと言われると、正直言ってみれば意識がないんです。私には外からコロナを見るという視点がないので、先ほどの島田さんのお話は衝撃的でした、自分だけのことを考えてみると、あまり変わってない。コロナ以前から私はずっと名古屋にいて、行動パターンとしては自宅と大学の研究室と教室を行ったり来たりするだけでした。コロナ対策のために授業はオンライン移行したので、教室に行かなくなりましたが、その代わりに学生の自宅とつながるオンライン授業に変わっただけです。

私も全く技術的には駄目なので、オンライン授業も最初は大変でしたが、良かったなと思ったのは、何かわからないことがあったときに、幸い、先ほど佐藤先生が、「銀座通り」とおっしゃったんですけども、この我々がいる研究室の通り、他のいろんな先生がおられて、若手の先生なんかにもいろいろ尋ねることができて、教えてもらえることができたという。それで随分助かりました。年長の教員が偉そうな顔をしてあれこれ言うというシーンはあったにしても、若手の先生方にいろいろ教えてもらわないと物事が進まないという経験ができたというのは、新鮮でした。ただ、自分の生活パターンはどうかというと、全然変わっていません。

沼野 コロナ禍でも変わらない、というのも教師としてのぶれない姿勢ですから、それも立派じゃないでしょうか。

奥田 いや、教師としてということだったなら、やっぱりすごい経験をいろいろさせてもらいました。対面がほぼなくなって、オンラインで、先ほど島田さんがおっしゃったことですが、伝えるとか伝わるということ、これはどういうことなんだろうと、わからなくなっちゃいました。それはパワーポイントの動画を使ってオンデマンドで授業を見たらという形を取ったんですが、それと、もうに加えて、Googleのクラスルームを使って、そこにパワーポイントの動画もアップしたうえで、感想を全員に出してもらったんです、それで出席をとるということにして。するといろいろと感想や意見を書いてくれる学生がいて、それに対してこちらコメントを返していたら、まるで文通をするみたいになった。そう

いうやり取りをすると、学生の実際の声が聞こえてきて、言葉のやり取りがすごく密になって。ものすごく新しい発見でした。皮膚感覚や触覚的な感覚はなかなか持てないけれども、一緒の空間を共有するという経験をすることになりました。その結果、学生に対する私のイメージというのは随分変えないといけないと思うようになりました。

沼野 オンライン授業でむしろ学生とのやり取りが密になってコミュニケーションが深まったというのは素晴らしいことで、オンラインの大きな利点だと思いますが、それって教師にとっても、今までよりもはるかに手間も時間がかかることですよね

奥田 そうです。労力はとんでもないしんどさでした。学生からは最初は簡単な感想しか来なくても、こちらがそれに対してとにかく何らかのコメントを返すと、次はもう少したくさん書いてくれる。そういう経験をやると、やめられなくなっちゃって。一期ではほぼ全ての授業で全ての学生にコメントを返すということをやったので、もうへとへとになりました。二期もそれを目標として始めたんですが、三回授業が終わったところでへたばってしまっただけで、あとは学生たちに謝り続けているという現状です。

沼野 奥田さんを筆頭に、真面目に授業に取り組んでいる先生に共通しているのは、授業の準備がはるかに大変になったということです。オンライン授業のためにスライドを作ったり、オンデマンド授業のために録画するにはものすごい手間がかかります。私などはもう大学教師を三十五年もやってきましたから、自分のよく知っている内容についての講義であれば、事前に特に準備しなくても、資料を二、三枚配って教壇に立てば、二時間でも三時間でも講義できました。ところがオンラインではそれができなくなりました。パワーポイントのスライドを、図や写真もたくさんいれて分かりやすいきれいなものを作ろうとすると、一回の授業の準備のために四時間も五時間もかかることがわかったんです。

それに加えて、奥田さんのようにクラスルームやEメールで一人一人の学生と丁寧なやりとりをしていたら、もう無限に時間がかかる。こち

らも人間ですから、うつかり返事をしそくなって二日経ってしまうなんてこともあり得るわけですが、それではせっかく成り立ちかけたコミュニケーションが途切れる恐れがある。だから教師は時間を空けないで必死に学生とのやりとりを維持しなければならない。

世の中には、大学の先生はオンラインで楽をしている、ずるをしているとか、間違ったイメージを抱えている人たちが多いようです。ある国會議員などは、SNSで堂々と、「大学はオンライン授業によって教育責任を放棄して、学生の学ぶ機会を奪っている」なんて趣旨のことを書いてあきました。その政治家はおそらく正義感から発言したのかもしれませんが、現場をまったく知らない人の思い込みに基づく正義感の発揚ほど恐ろしい害悪をもたらすものはない。オンライン授業は、大学がこんな状況下でも学生の学ぶ機会を最大点確保するためにどうしたらいいのか、必死になって努力して行ってきたものですから。

「人間がいかに弱い、ヴァルネラブルなものか」

沼野 私がこの事態でまず思ったのは、いままで六十数年生きてきたけれども、こんな疫病の流行にも、もちろん戦争にも遭遇したことは一度もなかった、ということです。世界的に見た場合、じつは私たちはかなり稀な、とても幸せな平和な時代を生きてきたんだ、ということです。ところが実際にコロナの流行が始まると、これはもう予期していなかったものの「不意打ち」に他ならない。寺田寅彦が言ったように、「天災は忘れた頃にやってくる」。あるいはカミュが『ペスト』で書いているように、「この世には、戦争と同じくらいの数のペストがあった。しかも、ペストや戦争がやってきたとき、人々はいつも同じくらい無用意な状態にあった」(宮崎嶺雄訳、新潮文庫)というわけだ。

それで思い知らされたのは、人間がいかに弱い、ヴァルネラブルなものかということです。人類はこれだけ科学技術を発展させて、宇宙の果てまで探索したり、あるいは、逆に、極小の、原子核よりもさらに小さ

な物質の根源まで究明することができるようになったというのに、ウイルスの新顔一つ相手にうまく戦えない。だから人間は生き物としての自分の弱さを自覚して、自然の中で環境とどう調和して生きるべきか考えるべきじゃないかということを改めて思った次第です。新型ウイルスの発生はこの国の誰のせいかというよりは、一番根本的には、人間が自然環境を破壊してバランスを崩してしまったということが大きい。新しい感染症をもたらすウイルスは今後も何度も、ひよつとしたらより頻繁に出てくる可能性があると言われているだけに、地球環境全体のバランスの問題として、もっと広い視野から見る必要があります。

レジリエンスとコロナ後の「新しい生活」

沼野 さて、皆さんに次にかがたいのは、「新しい生活」ということです。この座談会を行っている二〇二〇年十二月の段階では、コロナ禍は終息に向かうところか、再燃しつつあり、終息のめどはたっていない。しかし、そうはいってもコロナ禍が永遠に続くということもあり得ない。そうだとするならば、その先どうするべきなのか。今後、今回のコロナの経験を踏まえてどんな「新しい生活」を思い描けるのか、やはり考えないといけないでしょう。佐藤さん、いかがですか？

佐藤 最近メディアで「ニューノーマル」と言われているんですが、いったい「ニュー」をどう理解したらいいんだろうかと思っています。政府からの情報やメディアに踊らされているような感じがしていて、その中で自分が自分であるという、そういう姿勢を保つというのが、コロナ禍が長引けば長引くほど必要ではないかと感じています。

私の分野ですと、災害後の復興に関してレジリエンス(弾力、回復力、立ち直る力)の重要性がよく言われます。今回のコロナ禍においても、コロナに立ち向かう力、「これ乗り越えるぞ」というような意思を持っているんでしょうか。そういうものが必要ですし、それには道徳律も含めて自分自身の中に確固たる軸というか、そういう自分が自分であるための

しっかりとしたものを持つということが非常に重要だと思いました。さらに言えば、コロナ禍で、自宅で過ごす時間がより多く与えられている状況の中で、その時間をどういうふうに通ぐすのかということは、自分への挑戦になっていると感じています。ですから、自分を自分らしく活かして生きるということが今後の「新しい生活」を考える上では重要ではないかなと思いました。

そんなことを考えていた時に、『五体不満足』の著者として有名な乙武洋匡さんの言葉が毎日新聞に載っていました。乙武さんは「感染拡大が収束すれば、皆さんも日常へと戻っていくでしょう。でも、皆さんの日常へ戻れない人々がいることを忘れずにいてほしいです」と言っています。この言葉は、私が従事していた国際協力とか国際開発のスピリットを思い起こさせてくれて、私の心に強く響きました。今回のコロナ禍では、これまで不自由に感じていなかった人たちが、不自由な生活を強いられたわけですが、実は、ノーマルだった時代に、外出することがなかなか難しかったりする方々がいらつしやって、彼らにとって、ニューノーマルでのオンライン配信のイベントやリモートワークが恩恵だということがあるわけです。そういう意味では、これまでの「日常生活」で生きづらさを感じている人々の生活もよくなる。今回のコロナ禍をむしろ逆手にとって、そんな「新しい生活」を築こうという機運の高まりも必要だと感じました。

なんでも適当にこなせる能力が大事

島田 私は学部での授業経験、とりわけ一、二年生の講義経験が多くありませんでした。東京外国語大学に移ってから本格的に学部の授業を持つようになったのですが、そこで一、二年生の学生に伝えようと思ったメッセージの一つが、さつき佐藤さんも言われた、レジリエンスに関することです。これはもともと私の研究テーマだったのですが当時は全然流行らないテーマでした。忘れられた頃に経済界が急に注目し始めたという

感じます。

学校教育システムの中では、十九世紀のヨーロッパで発達した社会進化論の考え方がいまも基盤となっていて残っています。その中でアフリカは、ずっとマイナスのイメージを与えられてきました。高校までそのような教育を受けてきた学生たちのアフリカに対するイメージは非常にネガティブなものです。それをひっくり返せないかと思っている私は、アフリカ社会に何か見るべきものがないだろうかいつも考えてきました。その時に見つけたことの一つが経済効率性に対するアフリカの危険分散志向の考え方です。

経済効率性の観点から、アフリカの人は怠惰で、経済的思考能力がなく、仕事もやる気がないと見なされることが一般的だろうと思います。ところがアフリカでは、危険分散が一番大事なことで経済の効率を追うのはすごく危険だということが分かります。危険分散をしていないと、例えばバッタの大群に襲われでもしたら、もう生きていけなくなってしまう。干ばつもそうです。だから自然環境を見ないで、経済効率だけで人や社会を評価することは間違っている危険性があることをアフリカは教えてくれていると思います。

もう一つ、アフリカでは、一人の人間がいろいろなことができる能力、多くの生業をこなせる能力が重んじられます。フランス語という「プリコラージュ」です。日本とは対極にあることかもしれません。欧米や日本では社会の発展にともなって職業は専門分化し、人々は専門を磨くことが求められています。大学でもより高度な専門教育に特化し、そのおかげで学問も進化してきました。このこと自体は私も否定するつもりはありません。

アフリカに進出した日本企業の人たちは、「アフリカの人たちは何でも器用にこなし、車が故障してもすぐに直すけれども、きつちは直せない」という言う人が多いですが、適当に何でもこなせるという能力がアフリカでは大事なのだと思っています。見方を変えれば、変化の激しいアフリカの社会の中では極めて社会適応的な能力だと思うからです。ア

フリカの社会が持っていたこういうシステムはむしろ積極的に評価されるべきではないでしょうか。

沼野 「プリコラーージュ」というのは文化人類学者のレヴィ・ストロースが『野生の思考』で論じてよく知られるようになった概念ですね。「器用仕事」と訳されることも多いのですが、要するにありあわせのもので、当座の必要に応じて修繕したり寄せ集めて作ったりする能力。じつは我々が大学で教えるべき「一般教養」も、そういうものじゃないんでしょか。名古屋外大では亀山学長の命名によって「世界教養」と呼ばれていますが、これは特定の一分野の専門知識を深く身につけるんじゃないんで、いくつもの分野の知識を「適当に」、つまりいい加減にではないにせよ、この世界で生きていくために必要な程度に身につけてほしい、ということです。現代の世界は非常に多様であるだけでなく迅速に変化しつづける。その世界に関わりながら生きるためには、自然科学から社会・人文科学まで、複数の様々な分野のことを知らないといけない。イギリスの思想家ジョン・スチュアート・ミルもある大学の名誉学長就任記念講演で、「単に一つの事柄だけを知るのはなくて、一つの事柄についての詳しい知識を、多くの事柄についての一般的知識と結合させること」が大学教育にとって一番大事だと言っています。それこそが我々の目指すリベラル・アーツ教育でもあるとすると、世界教養とは世界の中のサブイバルのために必要な、「知のプリコラーージュ」能力じゃないかという気がしてきます。学生たちには、多少浅くてもいいけれどもいろいろなことを知っていて、必要に応じてそれらの知識を結び合わせ、世界で何が突発してもそれなりに対応できる人間になってほしいと思います。

人間の結びつきの大切さとSNSの危険

島田 あと、もう一つ、アフリカの人たちは非常にネットワークが濃密なんです。それこそ、農村で調査していると、知り合いの人の名前を

聞くと、例えば血縁関係の人だけでも三十、四十人の名前が簡単に挙がります。日本の学生に「知っている血縁の人の名前を挙げて」と言ってもなかなかそうはいかない。日本ではデジタル情報を使ってネットワークを作っていますが、そのネットワークが切られたときの社会はとても脆弱です。

アフリカの場合はソーシャル・ネットワークといっても携帯電話くらいのもので、それをうまく活用していて、それとともに人と人のつながりは維持しさらに強化しているほどです。私たちもインターネット上のネットワークを活用すると同時に、本当の意味で人と人を結びつけることを学ぶ必要があるんじゃないでしょうか。ただ先ほどAIに関連して言ったことですが、ソーシャル・ネットワークには非常に危ない側面があります。SNSの利用に関連して既に問題になっていることです。非常に厄介な誤解釈とか、恣意的な解釈がいつも簡単に拡散し誰の目にも触れるようになってしまいうからです。そのため一人一人がいわば「ワクチン」を打たなきゃいけないと思うんです。皆がAIの専門家になる必要はありませんが、文系理系を問わず、基礎的なところで騙されないう程度には誰もが知らないといけない。これからの「新しい生活」で間違いを防ぐために必要じゃないかと思っています。

沼野 確かに欧米先進国や日本では、インターネットによるSNSが発展した結果、生身の人間の関係がますます希薄になると同時に、新たな危険が増していますね。これはル・ボンとかカネッティが論じてきた「群衆」の新たな形態だと思えます。いまSNSを通じて形成されている新たな「群衆」というのは、匿名ゆえに無責任である、嘘や悪意がどんどん伝染していく、そしてプロパガンダによって操作されやすい、といった特徴を備えています。そういう危険に対して「ワクチン」が必要だというのは、まったくおっしゃる通りです。ワクチンを打つのは大学教師の責務でもありますね。

「生き抜く」しかない

奥田 私に一つ言えることがあるとすれば、コロナの現状がこの先もつとひどくなる可能性があるという状況で、何が求められるかというのと「生き抜く」ということしかないんじゃないでしょうか。具体的には次元の違う様々な問題がいっぱいあるにしても、姿勢としては「生き抜くんだ」というしかない。佐藤さんも言われたことですが、コロナ禍に限らず、その以前から体の不自由な人、いろんな困難を抱えている人がたくさんいたわけです。多くの人たちがそれぞれ困難を抱えているということには代わりがない。そんな状況を踏まえて、いまこの事態をどうやって生き抜くか、考えるしかないと思います。

私はこんな状態も「いつかは終わるよ」と学生たちには言っているんですが、終わったときにどうなっているかは、ちょっと想像がつかない。ワクチンができて安心になるのか、それとも脅威は残って元には戻れず、接触の機会を減らすとか密になることを避けるとか、そんな風に人間関係のあり方が変わってしまうのか、そこはわかりません。その先をどう生き抜くかということが、また具体的な課題として立ち現れるでしょう。そう考えたとき、やっぱり佐藤さんも島田さんもおっしゃっていた「レジリエンス」というのがすごくいい言葉ですね。どんな事態にもしなやかに対応していく姿勢をどうやって身につけるか。それが教養という言葉の意味でしょう。オンライン授業を通じてでも、どんな事態にも対応して生き抜くことの大切さを学生に何とか伝えられるような関係が構築できるといいと思っています。

沼野 「生き抜く」しかないって、まさにその通りですし、教師がみずから力強くそういつてくれたら学生は励まされるでしょう。ただ奥田先生の学生の中には、この状況下でちょっと弱ってしまっていて、生き抜くのが難しそうな学生はけっこういるんですか？

奥田 まさにそこにオンラインの危険性があると感じるんです。つまり、生きにくさを抱えていても、それが伝わりにくいんです。対面の授業で

は敏感な先生なら、学生の顔色一つ、言葉の抑揚一つで「あの学生はちょっと気をつけたほうがいい」と分かかって、それなりの対応ができる可能性があるんですけども、オンラインの場合は学生の側がはっきりと言葉にしないと、伝わってこない。そこは非常に危険だと思います。

やっぱり、言語化することは非常に大事ですね。いろんな授業で学生たちに接していて感じるんですが、いまの時代というのは「感情の時代」じゃないでしょうか。学生たちにとっては、自分の感情で全てが決まってしまうというようなことが多い。学生たちに「今はやっている歌ってどんなの？」と聞いたことがあるんですが、挙げられるのはほとんどがラブソングというか、個人的な気持ちを歌っている歌で、「それにすごく共感します」という学生が多いんです。この世界には自分の感情とは関係なく存在する現実があつて、それが迫ってくるという認識がなく、自分の感情をどう処理できるのかという問題に尽きてしまっている。しかも、自分の気持ちを言語化して自分の言葉で表現するを経験してないもんだから、誰かが歌で歌ってくると、「あ、ぴったりだ」と飛びつく傾向が強いようです。先ほど言ったように、オンラインだと、学生が自分で自分の状態を言語化してくれないと、教師にはなかなか伝わらないという危険があるので、やはり学生の皆さんには言語化の重要性を伝え続ける必要があるんじゃないかなと思います。

沼野 確かに言葉の大事さ、言葉で表現していくことの大事さを教えることこそ、大学の教師として基本だと思います。細分化された専門的知識を教える以前の、すべての根本でしょう。

人間は疫病をどう描き、どう戦ってきたか

沼野 ここで私からは、ちょっと文化史的な話を付け加えさせていたいただきたいと思います。世界の歴史の中で伝染病が繰り返して現れてきたのは、周知の事実ですが、文学で人々がそれをどのように描いてきたのか、授業でも取り上げようと思って、昔のものにさかのぼって少し読んでみま

した。一番古いものの一つは、古代ギリシャの歴史家トゥキディデスの『戦史』ですね。これはペロポネス戦争の歴史を記録したのですが、その中に、当時アテナイで流行した恐ろしい疫病に関する記述がある。罹患した人の苦しみ、周囲の人々の冷たい対応、病気の悪化のプロセスと罹患者がどんなに苦しんで死んでいったか——そういうことが克明に書かれていて驚かされまるとともに、きちんと記録することがいかに大事か、改めて思いました。それにひきかえ、今の日本では不都合な記録を隠したり、湮滅したりということが平気で行われていて、嘆かわしいことです。

もつと新しい二十世紀の小説では、今年時ならぬベストセラーになった、カミュの『ペスト』。これは私も若い頃、カミュとかサルトルとかはやった頃、読んでいたんですけど、どこか北アフリカの町で疫病がはやってロックダウンされたというそれだけの話で、自分には関係のない絵空事のようにしか思えなかった。ところが今回再読して、これは本当にすごい小説だとびっくりしました。いまのわれわれのことを書いたもののように見え、迫ってくるものがあります。この小説の中でリウーという医師が献身的にずっと病人たちに寄り添い続けるんですが、彼は人並みはずれた偉人でもヒーローでもない。彼は疫病と戦う「唯一の方法は、誠実さです」と言い、誠実さとは「自分の仕事をやるだけのことだ」と説明します。災厄のさなかにもこのように誠実に自分の仕事を続ける人の姿が描かれていて、感動しました。「誠実さ」というのはいまの日本の政治に一番欠けているものかもしれません。大学教師のやつっていることは医療従事者の仕事に比べたら全然大したことはないにせよ、われわれも学生たちに向き合い続け、自分のやるべき授業をきちんとやり続けられればいいんだ、と力づけられるところもありました。

ここで目の保養というか、気分転換に、図版を少しお見せしたいと思います。日本で疫病や災厄どう描かれてきたかということなんですが、じつはいくつも空想的な面白い絵が描かれているんですね。一枚目は明治時代の錦絵で、コレラを頭が虎で体が狼、後ろは狸（ちよつと下ネタ

になって恐縮ですが、後ろの大きな袋状のものは狸の陰囊です）、三つあわせて「こ（虎）ろ（狼）り（狸）」になる。当時猛威をふるったコレラは、人がころりと死んでしまうので「ころり」とも呼ばれて恐れられたんですが、こんな奇怪な動物の姿で思い描かれたとは！

二枚目はいわゆる「鯨絵」です。一八五五年に安政の大地震があったとき、これは地下の大ナマズの仕業だという風説が広まって、こんな絵がたくさん書かれたんです。たいへんな悲劇を題材にしたながら、ユーモラスなのはやはり庶民のどんなときにも「生き抜く」生命力の現れじゃないでしょうか。大地震の数年後にはやはりコレラの流行があつて、地震と疫病に次々に襲われるなんて、今の日



図版1 「虎列刺退治」明治19年 木村竹次郎画
出典：東京都公文書館 Facebook



図版2 安政2年の地震直後の鯨絵
出典：ウィキペディア「鯨絵」の項目

本とじつはまったく同じようです。

最後の三枚目は、最近急に有名になったアマビエです。これは江戸末期に刷られた木版画で、アマビエというのは肥後の国で夜な夜な海から現れて、豊作と疫病の流行を予言したと言われています。いずれもいまから見ると面白可笑しい、笑ってしまうような絵ですけども、人間はこんな形で想像力を働かせ、創意工夫を重ねて疫病や災厄に向き合ってきたということがわかります。残念なのは今はやっている新型コロナウィルスが小さすぎて、どう工夫しても面白い妖怪のように描けないということです。

ところでアフター・コロナ、つまりコロナの後元のような生活に戻れるのかということですが、コロナ禍の初期にイタリアでベストセラーになった、パオロ・ジオルダーノという作家の『コロナの時代の僕ら』というエッセイ集があって、そこですでに著者は、元通りになるなんて考



図版3 アマビエ 江戸時代末の弘化3年(1846年)に刊行された木版画、京都大学付属図書館所蔵
出典：ウィキペディア「アマビエ」の項

えてはいけない、むしろ元通りになってほしくないものを忘れてはならない、と警告しているんです。つまり、コロナ禍を経て人間は変わらなければならない、というんですね。そういえばドストエフスキーの『罪と罰』のエピソードでは、主人公のラスコーリニコフが恐ろしい伝染病が世界で流行して人類が滅亡の危機に瀕するという悪夢を見る箇所があるんです。そこで、ドストエフスキーは死ななかつた一握りの「清らかな人々」が新しい人類を作り「新しい生活」を始めるとも書いています。役所が上から押し付ける「新しい生活様式」などという次元のことではなく、私もやはりドストエフスキーが言うような意味での、まだ形をとっていない「新しい生活」があるべきではないか、そういう風にして人類の歴史は更新されていくべきだとぼんやり考えているところです。

コロナとともに君たちはどう生きるか

沼野 それでは最後に、今後大学の授業はどうなっていくのかという見通しも踏まえて、コロナ禍の中、オンライン授業を受講してきた学生たちにメッセージをお願いします。

佐藤 まず、今後大学の授業はどうなっていくのかについてお話しします。オンライン授業に取り組むことを通して、オンライン授業の利点を理解した私の中で芽生えた問題意識は、「対面授業は今後どうあるべきか」ということでした。大学では前期・後期共にオンライン授業をやりましたが、後期に「クリエイティブ・ウィーク」という特別な週を設けて学生が登校するというイベントがありましたよね。私が所属する学科では、第二回目の「クリエイティブ・ウィーク」時に大教室で学生にお話しするということがありました。あとで参加した学生にアンケートで感想を聞いたのですが、その中に「オンラインでよかったのに」というのがあったんです。非常に気になりました。その次の「クリエイティブ・ウィーク」では、学科の各教員がゼミの対面授業をやったのですが、私は、学生から「来た甲斐がありました」と言われるような授業をしようと考え

に考えました。ここでの熟考とそれを反映させた対面授業での学生の反応を見て、対面授業は今後どうあるべきかについて私なりの見解がまとまったような気がします。

このような経験を踏まえた上で今後の大学の授業がどうなっていくのかについて考えてみますと、今後はオンライン授業を対面授業の代替と考えずに、その強みを生かしたオンラインと対面を組み合わせた新たな授業形態の構築に力が注がれると思います。また、それに対する投資もなされていくでしょう。

例えば、講義形式の授業は遠隔で、対面授業はグループ討議のようなアクティブ・ラーニングを活用して、考える力、すなわち答えのない問題に自分なりの答えを持つ力を身に付けることができるような付加価値を持つ内容を重視する。また、対面授業であっても、まずはオンラインで予習し、その後で対面授業に臨むと言った反転授業などが取り入れられていくのではないかと思われます。

次に、学生へのメッセージですが、コロナ禍の中で学生が時間をどう使うかがまさに問われていると思います。たとえば、自己啓発に一生懸命な人。オンライン授業を片手間に受けながら、アルバイトに精を出す人。既に様々な学生が存在します。そんな状況の中で、私は、「今の時間を、自分をリ・クリエイトする機会ととらえてほしい」ということをお伝えしたい。時間の使い方は読書かもしれない。映画、音楽かもしれない。またこれら全部かもしれない。人それぞれです。そして、自分をリ・クリエイトすることで、自分の持つ軸に基づいて行動し、どんな局面に立たされても「レジリエント」に生き抜く人に成長してほしいと願っています。

授業は多少サボっても、もっと大事なものがある

島田 大学はこれからどうあるべきかと考えるとき、文科省が進めてきている大学の「出口の明確化」政策が非常に気になります。今は、学生

本人はもとより家族も一緒になって、「ここに就職するためにはこの大学がいい」といった理由で進学先を決めることが当然のように思われています。でも私たちが学生の時はそんなことはありませんでした。ですから、「CA（旅客機の客室乗務員）を希望していたのに就職できなかった」と深刻に悩んで立ち直れないくらい落ち込んでしまう学生がいると聞くとこの出口戦略の功罪を思わざるを得ませんでした。大学も結局は専門学校の延長線上にあると割り切って考えることもあり得るかと思いますが、私はそのような考えにはまだ馴染めません。できるだけ効率良く就職に役に立つような教育システムを作れば良いということであれば、そのための授業はオンラインの方が有効だということかもしれませんが、どうもそうでない役割が大学にはあるように思われるのです。

一九八〇年代にアフリカに二年滞在して帰国したときに衝撃を受けたことがあります。同じ頃に経済学分野で有名なアメリカの大学から帰ってきた先輩がいたのですが、彼は帰国するときに授業で使える経済学のスライド一式（OHP用）を持ち帰ってきたのです。マクロエコノミーもミクロエコノミーも、一流の優秀な専門家が作ったそのスライドを使って誰でも授業ができるというわけです。

つまり、オンラインが可能な分野では——これは語学も一部はそうじゃないかと思いますが——各大学で優秀な教師を集めなくてもいいことになります。そうすると大学の存在価値は何だつてあらためて問い直されていることになります。

私達の学生時代は学戦紛争の時でした。ろくに講義もない状態で、「今の学生は社会的モラトリアムの状態にある」と批判されていたように思います。でも考えてみるとそのようなモラトリアム状態というのは人間にとつてすごく大事な時期ではないかと思えます。ソーシャル・ネットワークを作ることができるかけがえの時だからです。授業の枠外にある活動や、そこで友達関係を作ること、大学時代にはものすごく大事なことだと思えます。そのためだったら、時には授業はサボってもいいくらいだと思えます。ただそのためには、キャンパスがなきゃだめで

すけど。

ですから「私はCAになりたくて大学に入った」というような明確だけれど狭い目標をもつのは必ずしもいいこととは思いません。今の世の中、不安定で、公務員でさえも絶対的に安定した職業とは言えません。そんな中で「私が就きたい職はこれしかない」と決めて大学を選ぶということとは危ないことだと思います。そうではなくて、どのような状況になっても私は生き抜きますという、そういう能力を高めるために大学に入りますという気持ちが必要ではないでしょうか。授業がないときは友達と談笑するためにどこかに出かけるなりアルバイト先で知り合いを作るなりして、ソーシャル・ネットワークを作るために最大限自分の時間を使うという、そういう選択ができる大学を我々は目指すべきではないでしょうか。

大学のカリキュラムについて言えば、私の言う「プリコラージュ」能力を高めるためには、全体として一枚岩ではなく、色彩のはっきり違う学部が複数あって、学生は其中で好きなものを選び、右往左往しながらも自主的に選択して履修できる——そういうシステムを作らないといけないのではないかと思っています。外国語教育については、英語を第一の言語としてその習得のためにエネルギーを使うのはとてもいいけれども、さらにもう一つの言語を「副言語」として学ぶのは英語重視の方向と決して矛盾しないと思うのです。「いまロシアのことに興味があるから、ロシア語もやっていこう」と思う。これはある意味でプリコラージュ能力だと思います。

今のままだったら大学は消滅する？

奥田 オンライン授業をやって痛感したことです。徹底したオンライン授業を行い、特にオンデマンドの教材を作ってしまったら、「もう大学要らないじゃん」ということになりかねない。先ほど島田さんが言われたように、一流の専門家がわかりやすく楽しく専門知識を教授するオン

デマンド教材を組み立ててしまったら、しゃべるのが下手な教員がわけのわからんことを言っているような授業よりはるかに学生にとって役に立つ、と言われても仕方がない時代が来つつあるんじゃないかという気がするんです。

逆に言えば、そう言われても仕方がないようなレベルの授業を我々はやってきたかもわからんという反省があります。オンデマンド授業にしたら、本当にちゃんとした授業をやっている者とそうじゃない者の差が、学生から見れば一目瞭然というか、余計に強く感じられるんじゃないでしょうか。そうなってくると、進学率が五〇%を超えて、同じ世代の二人に一人が大学に入るという時代の大学が本当に何か提供できるものがなかったら、今までのままだったら大学は消滅するんじゃないか、という印象さえ持っています。

そういう流れの中で、大学は二極化、あるいは三極化するんじゃないかでしょうか。職業に就くための専門的な知識を習得するための場、というのが一つ。もう一つはキャンパスを提供して、そこで先ほど島田さんが強調されたソーシャル・ネットワークを作る機会と時間は提供します、実際にやるかは、自分で楽しく決めたいいい、というタイプの大学。それからその中間の大学、つまりどっちに転ぶかはあな次第、というタイプの大学もあるのかなあ。単なる漠然とした予感ですけども。自分たちに何ができるかと、学生たちに何を望むかということと言うと、先ほどの繰り返しになるんですけども、どういう分野に行っても生き抜くための力を身につけてほしい。うちの大学に来る学生の中には、入学の時点でもう、就職したい企業まで決めてしまっている人がいる。でも、そこに行けなくなったら人生の目標がなくなってしまうということにもなりかねない。

そんな危険のある学生が入ってきていることは事実なので、我々の使命は、まず「幻想だよ、それは」と言って、幻想をぶち壊す作業をできるだけ早い時点でやることです。教師は「どんな場面にも対応できる力を身につける必要があるよね」ということを伝える努力をしないと

ないし、学生と教師の間で考えをきちんと言語化して互いにやりとりを重ねることが必要です。そういう相互的なプロセスがオンラインだけでなく、対面でも成り立つ場としてのキャンパスを作っていきたいと思えます。

若者よ、ボーっと生きてんじゃねーよ！

沼野 私が最近気になっているのはソーシャル・ディスタンス（またはソーシャル・ディスタンシング）という言葉です。ディスタンスというと「距離」ですから、人と人の間を離そうという発想です。だから、実はWHOもこの言い方は適切じゃないということで、「フィジカル・ディスタンス」（身体的、物理的距離）と言うべきだと提言したくらいです。でもそれは一般には浸透せず、ソーシャル・ディスタンスという言葉が今、独り歩きしている。人と人の間を引き離すのは感染予防のために仕方ないんですけども、社会というのは人と人が繋がりを作ることによって成り立つものでしょう。

ソーシャル・ディスタンスという表現はおそらく文化人類学者のエドワード・ホールが定式化して以来一般化したものですが、ホールは自分の理論を「距離の学問」ではなく、「近接学」（proxemics）という新造語で呼びました。そこにも象徴的に現れているように、大事なものは人間にとって大事なのは距離をとることではなく、どれほど互いに近づけるかということでしょう。人と人を結びつけることは、大学という教育の場の責任でもあり、大きな可能性でもあるはずです。

私からの若い人たちへのメッセージとしては、いま君たちは本当に大変だと思うけれども、こんな事態なんだから、大変なのは当たり前だ！むしろ「こういう時代に生きることこそがめったにない機会だ」というふうに考えてほしい。こういう時代だからこそ、人間性があぶりだされて来る。

学生の皆さんは、政治家の誠実とは思えない発言やマスコミのずさん

な報道を鵜呑みにしないで、宣伝や流行に惑わされず、自分の心と頭をフルに使って、何が真実で何が嘘か判断してほしい。その判断のための批判的思考力を養うことが大学で勉強することの本当の意味ですし、そういう批判的思考力が試される時代に若い皆さんは生きている。

NHKの人気番組「チコちゃんに叱られる！」じゃないですけど、ボーっと生きているんじゃないかと、自分の感情の狭い世界で自足しないで、世界をよく見てほしい。コロナ禍のおかげで世界と自分との関係の見直しを迫られているんじゃないかと思います。とはいえ今の世界は本当に複雑で、多面的です。その世界とどう関わっていくか、そのためにも「世界教養」を身につけてほしい。教養というのは単なる飾りではなくて、世界と関わりながら生きていく人間の、基本的なサバイバルの資質なんです。